

# Jehovah 一考

——英訳聖書の神の名——

岩 下 俊 治

## 0. はじめに

聖書を読んでいると神の名に言及した箇所がある。しかし、「名」とは言い難い表現がされている箇所がある。次がその例である。

Isaiah 42:8<sup>1</sup>

I am the LORD: that is my name: and my glory will I not give to another, neither my praise to graven images.

I am the LORD: that is my name とある。「私は主、これが私の名」<sup>2</sup>と翻訳されている。第2節で扱うが、神の固有の名を示すヘブライ語の4文字語の Tetragrammaton を the LORD を訳しているのである。しかし、「主」は、「名」ではなく「肩書」あるいは「称号」であるので、この記述は不自然である。勿論、聖書中には、神を名ではなく比喩的な呼び名で示している箇所がある。例えば、「全能者」、「至高者」、「創造者」、「父」などである。次がその1例である。

Isaiah 13:6

Howl ye; for the day of the LORD is at hand; it shall come as a destruction from the Almighty.

Almighty 「全能者」と神のことが表されている。本研究では、このような

---

1 イザヤ書 42章 8節を意味する。英語聖書の引用は、断りのない限り Ellis Enterprise Inc の CD-ROM 版の *King James Bible* からのものである。

2 日本聖書協会発行の『聖書 新共同訳』のイザヤ書 42章 8節の訳である。日本語聖書の引用は断りのない限りこの聖書からのものである。

場合は考慮の対象にはしていない。問題とするのは、神の固有の名を示す Tetragrammaton を Lord のような肩書に置き換えて翻訳することである。聖書筆者が、固有の名を表す4文字語を使っている箇所を Lord と訳すことは、聖書筆者の意図が正しく伝わらないのではないか、という疑問が生じる。更に、聖書の正しい理解が得られるのか疑わしい。例えば、次のように同じ箇所複数の 'Lord' が記されている場合がある。

Palms110:1

The LORD said unto my Lord, Sit thou at my right hand, until I make  
thine enemies thy footstool.

これはダビデが書いた文である。The LORD said unto my Lord とある。一応、LORD と Lord と文字を大文字と小文字で区別してあるのだが、これでは、誰が誰に言っているのか、紛らわしい。

私のような英語学に携わる者のみならず、英文学を専攻したり、少しでも英語に関わっている者にとって、聖書は大変重要な研究対象である。従って、聖書についての正確な理解は、私たち英語関係者にとって不可欠である。そこで、聖書の神の名について調べることにする。調べるに際しては、原典のヘブライ語とギリシャ語から英訳された聖書を対象とする。主に、欽定英訳聖書(1611年)をテキストとして、聖書に書かれていることを基にして考察する。

1節では、聖書の神の名は LORD なのかを分析する。2節では、神の固有の名について分析する。3節では、Jesus が神の名なのかを分析する。4節は、神の名を Jehovah とすることの妥当性を扱う。5節では、神の名を Jehovah と特定することの意義を考察する。6節が結論である。

## 1 Lord は神の名なのか

まず、旧約聖書で神の名と Lord が結び付けられている箇所をいくつか挙げる。

Exodus15:3

The LORD is a man of war: the LORD is his name.

出エジプト記 15:3

主こそいくさびと、その名は主。

Psalm 99:6

Moses and Aaron among his priests, and Samuel among them that call upon his name; they called upon the LORD, and he answered them.

詩編 99:6

主の祭司からはモーセとアロンが

御名を呼ぶ者からはサムエルが、主を呼ぶと

主は彼らに答えられた。

call upon his name と called upon the LORD と his name と the LORD が結びつけられている。他の例として、

Jeremiah 48:15

Moab is spoiled, and gone up out of her cities, and his chosen young men are gone down to the slaughter, saith the King, whose name is the LORD of hosts.

エレミヤ書 48:15

モアブとその町々を滅ぼす者が攻め上り

えり抜きの若者も倒れ伏し、殺されると

その御名を万軍の主と呼ばれる王が言われる。

Amos 9:6

It is he that buildeth his stories in the heaven, and hath founded his troop in the earth; he that calleth for the waters of the sea, and poureth them out upon the face of the earth: The LORD is his name.

アモス書 9:6

天に高殿を設け

地の上に大空を据え

海の水を呼び集め  
 地の面に注がれる方  
 その御名は主。

いずれも、「名」と「(万軍の)主」とが結びつけられて、表現されている。

Lord を *Oxford English Dictionary* (以後、OED と表記する) で調べてみると次のような記述がある。

6. a. the Lord (vocatively Lord): God. Also (the) *Lord God, and occas. my, thy, our* (now rarely: see 7), *his, etc. Lord*. Cf. DRIGHTIN..

In the O.T. the Lord, a translation of the Vulgate Dominus, LXX. (中略)<sup>3</sup>, commonly represents the ineffable name *yhwh* (see Jehovah), for which *Adonai* was substituted by the Jews in reading; in a few instances *Adonai* occurs in the Hebrew text. (Vol. IX, 26)

これは、lord の 6 番目の語義の説明である。この説明によると、旧約聖書のラテン語ウルガタ訳で発音が不明な *yhwh* という単語を Dominus = 「神」と訳した。それを英語の Lord と訳したことがわかる。意味としては、「神」ということで、「名」ではないことがわかる。更に、*The HarperCollins Bible Dictionary* で Lord を調べると次のように説明されている。

a title of dignity and honor acknowledging the power and authority of the one so addressed. In the OT “Lord” is used to translate various titles for God (Achtemeier, 619)

title と書かれている通り、Lord は「名」ではなく、「肩書」であることがはっきりわかる。結論として、LORD あるいは Lord は「肩書」であって、神の「名」ではないことがわかる。

3 (中略)とあるのは、ギリシャ語文字表記の部分で、本論とは直接関係がないので省略した部分を示す。他の箇所でも同じことを意味する。

## 2 神の固有の名は何か

次に、OED の説明にあった yhwh を調べる。これは、Tetragrammaton と呼ばれるヘブライ語の 4 文字語である。OED の説明は次の通りである。

A word of four letters; spec. the Hebrew word written YHWH or JHVH (vocalized as YaHWeH, JaHVeH, or JeHoVaH, q.v.); often substituted for that word (regarded as ineffable), and treated as a mysterious symbol of the name of God; sometimes used as a title of the Deity (see quot. 1689).  
(Vol. XVII, 842)

神の名を示すヘブライ語 4 文字語であることがわかる。更に、*A Dictionary of the Bible* には次のように説明されている。

Greek for ‘four letters’, that is the sacred Hebrew name for God, the consonants YHWH (Exod. 3: 15); but because it was considered too holy to pronounce, Adonai (‘Lord’) was substituted by readers of the text. When the vowels of Adonai were inserted into YHWH the artificial name \*Jehovah was produced and established for generations by the AV. English translations (except NJB) adopt the convention LORD for the Hebrew Yahweh. (Elohim is rendered ‘God’.) (Browning, 366)

ヘブライ語の子音文字をギリシャ語の子音文字で表したもので、神の固有の名は余りにも神聖なものだとみなされて、発音を控えるようになった。<sup>4</sup> 英

4 神の名を使わなくなった理由について、Ellis Enterprise Inc の CD-ROM 版 *The Bible Library* に収録されている *Eaton's Bible dictionary* の Jehovah の項では次のように説明されている。"Whenever this name occurred in the sacred books they pronounced it, as they still do, "Adonai" (i.e., Lord), thus using another word in its stead. (中略) The Massorets gave to it the vowel-points appropriate to this word. This Jewish practice was founded on a false interpretation of Lev. 24:16." これは、マソラ学者と呼ばれる聖書を書き写す写字生が、Tetragrammaton に神を意味する 'Adonai' という発音を当てて、神の名を発音するのを避けたことを示している。その原因は、Leviticus 24:16( レビ記 24 章 16 節 ) の間違った解釈による、という説明である。その節は次のようになっている。

語の Lord に相当するギリシャ語の Adonai に置き換えられた。YHWH に Adonai の母音を挿入して Jehovah が作られて、欽定英訳聖書の時代までに確立された。しかし、英語翻訳者は、Lord を使っている、という説明である。

同じような説明が *Harris Theological Wordbook of the Old Testament* にもある。Harris Number: 27 の項に次のような説明がある。

To avoid the risk of taking God's name (YHWH) in vain, devout Jews began to substitute the word 'adona(y) for the proper name itself. Although the Masoretes left the four original consonants in the text, they added the vowels e (in place of a for other reasons) and a to remind the reader to pronounce 'adona(y) regardless of the consonants.<sup>5</sup>

これで、なぜ the Lord is his name. という「主」という肩書が「名」である、という表現が生じたのかわかる。元々、ヘブライ語の聖書にあった YHWH (tetragrammaton) を発音するには、神聖すぎるので発音しなくなり、マソラ学者と呼ばれる写字生によって adonai に置き換えられて、それが英語では Lord で表されてきた、ということである。

更に注目に値する説明が *Harris Theological Wordbook of Old Testament* にある。Harris Number: 484 の項に次のような説明がある。

The Tetragrammaton YHWH, the LORD, or Yahweh, the personal name

---

Leviticus24:16

And he that blasphemeth the name of the LORD, he shall surely be put to death, and all the congregation shall certainly stone him: as well the stranger, as he that is born in the land, when he blasphemeth the name of the LORD, shall be put to death.

blasphemeth the name of the LORD は神から処罰を招く、という掟である。神の名をむやみに口にしない、と理解できるが、それをユダヤ人は、神の御名を口にしてはいけない、と厳しく解釈したと考えられる。しかし、現在、神の御名がののしり言葉として使われていることは、この掟に反することと考えられる。寺澤 (2013, 5) には、Oh my God! ( まあ、おやおや ), ( 中略 ) God damn you ( こん畜生 ), ( 中略 ) Jesus Christ ( 畜生、くそっ ) とののしり言葉と神の御名が関係していることが指摘されている。現代人は、神の御名にそれほど敬意を持っていないと考えられる。

5 Ellis Enterprise Inc の CD-ROM 版 *The Bible Library* に収録されているものからの引用である。

of God and his most frequent designation in Scripture, occurring 5321 times (TDNT, III, p. 1067) in the OT (KJV and ASV, the Lord, or, in those contexts where the actual title “Lord” also occurs, GOD, except KJV, Jehovah, in seven passages where the name is particularly stressed (Ex 6:3; Ps 83:18 [H 19]; Isa 12:2; 26:4] or combined with other elements, such as Jehovah Jireh [Gen 22:14; cc Ex 17:15; Jud 6:24; ASV, consistently Jehovah]).<sup>6</sup>

ここで注目に値するのは、Tetragrammaton が旧約聖書中に 5321 回書かれていることである。これほど多くの箇所では書かれている神の固有の名を他の語で置き換えるのは、妥当なことかと疑問が生じる。聖書筆者たちにとって、神の固有の名は、それほど多くの回数表記に値する大切な名である、と理解することができる。そのような固有の名を他の語に置き換えて翻訳することは、聖書筆者の意図を反映させていなので、妥当でないと考えられる。

### 3 Jesus は神の名なのか

次に、新約聖書の神の名について考察するが、Jesus は神の名なのかを考える。<sup>7</sup>まず、OED の Jesus の説明に注目する。

…*Jehoshua* or *Joshua* (explained as ‘Jah (or Jahveh) is salvation’: cf. *y’shūāh* ‘salvation, deliverance’, and Matt. i. 21), a frequent Jewish personal name, which, as that of the Founder of Christianity, has passed through Gr. and L. into all the languages of Christendom. (Vol. V Ⅲ, 222)

ヘブライ語名の *Jehoshua* や *Joshua* のギリシャ語表記で、語彙は *Jah* (or *Jahveh*) is salvation という意味があると説明されている。勿論、キリスト教

6 Ellis Enterprise Inc の CD-ROM 版 *The Bible Library* に収録されているものからの引用である。

7 イエスが神ではなく、神のような存在である、という点については、岩下 (2001) を参照のこと。

の創設者である。興味深いことに、Jesus という名には、Jah (or Jahveh) と表記されていることから、Tetragrammaton が含まれているということである。このことを確認するために他の辞書も調べてみる。*Vine's Expository Dictionary New Testament* によると、次のような説明がなされている。

…is a transliteration of the Heb. “Joshua,” meaning “Jehovah is salvation,” i.e., “is the Savior,” “a common name among the Jews, e.g., Ex. 17:9; Luke 3:29 (RV); Col. 4:11.”<sup>8</sup>

ここでも Jesus はヘブライ語名 Joshua のギリシャ語表記で、Jehovah is salvation. という意味がある、となっている。従って、もし、Jesus という名を認めるならば、Jahveh あるいは Jehovah という Tetragrammaton で表される神の固有の名を認める必要がある。

Tetragrammaton を認めない理由として、正確な発音がわからない、という点があった。しかし、これは妥当な理由といえるだろうか。なぜなら、Jesus という名も時代によって発音は変化してきている。実際、イエスの生きていた時代に人々はヘブライ語を話していたので、イエスはヘブライ語で呼ばれていたはずである。そうであれば、OED の説明にあった Jehoshua や Joshua と呼ばれていたはずである。それをギリシャ語表記して発音しているので、当時の発音とは違っているはずである。そのことを示す事実として、OED の Jesus の項の発音の歴史的変化の説明がある。

In OE. rendered by *hælend* ‘saviour’ (see HEALEND); but during the ME. period regularly used in its OF. (objective) form *Iesu* (Jesu). The (L. nom.) form *Iesus* (Jesus) was rare in ME., but became the regular Eng. form in 16th c. Yet in Tindale’s New Test., 1525–34, the form *Iesu* was generally used where the Gr. has (中略), the Vulgate *Iesu*, in the vocative and oblique cases. This was, as a rule, retained by Coverdale 1535, and in the Great Bible 1539, also, in the vocative instances, in the Bishops’

8 Ellis Enterprise Inc の CD-ROM 版 *The Bible Library* に収録されているものからの引用である。



Bible 1568; but in representing the Gr. oblique cases, this has *Iesus*. *Iesu* disappeared from the Geneva 1557 (exc. in one place), and from the Rhemish 1582, and the version of 1611. *Jesu* was frequent in the earlier forms of the Book of Common Prayer, and survives in one place; in later use it occurs in hymns, rarely in nom. or obj., but frequently in the vocative. In hymns, the possessive *Jesus*' is commonly sung ('ʃi:zju:z). (Vol. V Ⅲ, 222)

この説明にあるように、古くは 'Iesu' や 'Jesu' が使われていた。現在の 'Jesus' は所有格の形が基になっていることがわかる。イエスの名前の発音が、このように時代と共に変化してきても、それが不正確だからイエスの名前を使わない、ということはない。<sup>9</sup> その時代、その時代で一般に受け入れられている発音を使って表記している。そうであるならば、神の名前も発音がはっきりしないから 'Lord' で置き換えるのではなく、その時代、その時代で一般に受け入れられている発音と表記を使うべきではないだろうか。次節では、神の名として何が受け入れられているかを考察する。

更に、新約聖書に Tetragrammaton が使われているのかについて調べる。現存する新約聖書のギリシャ語写本に Tetragrammaton は使われていないので、新約聖書に神の固有の名は使われていない、というのが多くの聖書翻訳者の考えであった。新約聖書の筆者たちがヘブライ語の旧約聖書をギリシャ語に翻訳した *Septuagint* (『七十人訳』) に基づいて旧約聖書から引用している。その訳の Tetragrammaton はギリシャ語で神を表すキュリオスもしくはテオスに置き換えられていたので、それら筆者たちは神の固有の名を使わなかったというのが、以前の理解であった。しかし、1947年以降、死海写本に代

9 語源的には正しくない表現が、多くの人に受け入れられて一般に使われている例はたくさんある。例えば、英語の別れの挨拶の *goodbye* がその1例である。語源的には、*God be with ye*. 「神が共にいてくださいますように。→神のご加護をお祈りします。」という表現が、時間の経過と共に1語化したのである。英語の挨拶言葉は *good* で始まる。*Good morning* や *Good afternoon* がそれである。ある時、ある人が冒頭の *God* と *good* を勘違いして *goodbye* と使ってしまった。その語源的には誤りの表現が一般に受け入れられて、現在に至っているのである。現在、語源的に *goodbye* は間違っているから使うべきではない、ということの問題にする人はひとりもない。*Jesus* の場合もそうである。語源や文法規則から見て正しくない表現が一般に受け入れられて、使われると、それが正しい表現とみなされるのである。言語現象の1つの特徴といえる。

表されるような古い *Septuagint* の写本がいくつか発見された。そうした写本に Tetragrammaton が使われていたという証拠が見つかっている。その点について、George Howard (2000) は次のように書いている。

Important finds in a Cairo synagogue confirmed the place of hwhy in both the pre-Christian *Septuagint* and Origen's *Hexapla*. In 1959, P.E. Kahle published *The Cairo Gizeza* describing the use of the Tetragrammaton in Jewish copies of the *Septuagint*. In 1958, Giovanni Mercati's study of the Tetragrammaton in a *Hexapla* copy from the same synagogue was published. Then, beginning in 1944 with an article by W. G. Waddell and continuing into the 1970's, other scholars such as Kahle, J.A. Emerton, Sidney Jellicoe, and Bruce Metzger wrote articles in theological journals and published books verifying the existence of the Tetragrammaton in Greek translations of the Hebrew Scriptures. (Howard, Overview, ii)

‘verifying the existence of the Tetragrammaton in Greek translations of the Hebrew Scriptures’ とあるように、*Septuagint* の旧約聖書中に Tetragrammaton が存在していたことがわかる。従って、現存する新約聖書の写本には見られないが、新約聖書の筆者たちが Tetragrammaton を使っていた可能性がある。それを Lord と英訳するのは、筆者の意図を正しく反映させた翻訳とはいえないので、妥当性に欠けると考えられる。

#### 4 神の名は Jehovah

ここまでの議論で、聖書の中で神の名は YHWH (tetragrammaton) で表記されていることがわかった。そして、伝統的にヘブライ語では母音が表記されず、神の名は神聖なものなのでむやみに発音しない、ということで正確な発音がわからなくなってしまった。そのため、不正確な神の名を使うよりは、Lord のような語を神の名の代わりに使う、という習慣が確立してきた、と理解できた。しかし、正確な発音がわからないから固有の名を使わない、というのは、Jesus の発音が時の経過と共に変化してきたことを考えた時に、

妥当な理由とはならないことがわかる。そこで、神の固有の名に何がふさわしいかを本節では考察する。

まず、Jehovah を OED で調べると次のような説明がある。

The English and common European representation, since the 16th c., of the Hebrew divine name Yhwh. This word (the ‘sacred tetragrammaton’) having come to be considered by the Jews too sacred for utterance, was pointed in the O.T. by the Masoretes with the vowels ‘ (= â), ô, â, of *âdônâi*, as a direction to the reader to substitute ADONAI for the ‘ineffable name’; which is actually done by Jerome in the Vulgate translation of Exodus vi. 3, and hence by Wyclif. Students of Hebrew at the Revival of Letters took these vowels as those of the word *Yhwh* (IHUH, JHVH) itself, which was accordingly transliterated in Latin spelling as *IeHoVa(H)*, i.e. *Iehoua(h)*. It is now held that the original name was *IaHUe(H)*, i.e. *Jahve(h)*, or with the English values of the letters, *Yahwe(h)*, and one or other of these forms is now generally used by writers upon the religion of the Hebrews. The word has generally been understood to be a derivative of the verb *hāwāh* to be, to exist, as if ‘he that is’, ‘the self-existent’, or ‘the one ever coming into manifestation’; this origin is now disputed, but no conjectured derivation which has been substituted has found general acceptance.

(Vol. V Ⅲ , 209)

4子音字の Yhwh と Adonai の母音を組み合わせて作られたもので、16世紀以降ヨーロッパで一般的になった。1611年に出版された欽定英訳聖書では、4箇所で Jehovah が使われている。以下のその箇所である。

Exodus6:3

And I appeared unto Abraham, unto Isaac, and unto Jacob, by the name of God Almighty, but by my name JEHOVAH was I not known to them.

Palms83:18

That men may know that thou, whose name alone is JEHOVAH, art the most high over all the earth.

Isaiah12:2

That men may know that thou, whose name alone is JEHOVAH, art the most high over all the earth.

Isaiah26:4

Trust ye in the LORD for ever: for in the LORD JEHOVAH is everlasting strength:

更に、1901年出版の *American Standard Version* の preface の iv ページには、次のように Jehovah を使う理由が記されている。

The American Revisers, after a careful consideration, were brought to the unanimous conviction that a Jewish superstition, which regarded the Divine Name as too sacred to be uttered, ought no longer to dominate in the English or any other version of the Old Testament, as it fortunately does not in the numerous versions made by modern missionaries. (中略)<sup>10</sup> This personal name, with its wealth of sacred associations, is now restored to the place in the sacred text to which it has an unquestionable claim.

神の御名が神聖であるから発音すべきでない、というのはユダヤ人の迷信である。そして、それは妥当な考えではない、だから、神の固有の名 Jehovah を使う、という内容である。

しかし、その後、再び神の固有の名 Jehovah を Lord に置き換えることが行われるようになった。例えば、1952年出版の *Revised Standard Version* のはしがきでは、Jehovah を LORD に置き換える理由が、次のように説明されている。

---

10 ここの(中略)は本論に直接関係のない部分を省略したことを示すものである。

For two reasons the Committee has returned to the more familiar usage of the King James Version [that is, omitting the name of God]: (1) the word 'Jehovah' does not accurately represent any form of the Name ever used in Hebrew; and (2) the use of any proper name for the one and only God, as though there were other gods from whom he had to be distinguished, was discontinued in Judaism before the Christian era and is entirely inappropriate for the universal faith of the Christian Church.”<sup>11</sup>

理由が2つ示されている。2つ目は、ユダヤ教とキリスト教の教理的なことに関係すると思われるので、ここでは扱わない。1つ目の理由は、Jehovahは不正確な名であるから使わない、という理由である。しかし、神の固有の名を表す Tetragrammaton を使っている聖書筆者の意図を反映しているとは考えられないので、妥当な理由とはいえない。3節で論じたように、Jesus というイエスの名自体が不正確である。ヘブライ人名の Jehoshua か Joshua をギリシャ語文字に置き換えたもので、最後の s は所有格形に由来するものである。Jesus が不正確な名だから、Jesus という名を Lord や high priest という肩書に置き換えようとする人はいない。

また、Jesus の語源は、“Jehovah is Savior”である。Jehovah という神の固有の名が含まれているので、Jesus を使うのであれば、Jehovah も使うべきである。従って、Jehovah という神の固有の名を LORD に置き換えるのは、妥当だとはいえない。

また、同じく3節で論じたように、不正確な名であっても長年使われて、多くの人に浸透しているのであれば、それを使うことは何の支障ももたらさない、ということである。Jesus は不正確な名であるが、多くの人に浸透しているので、だれもそれを問題視する人はいない。Jehovah も16世紀以降使われてきて浸透しているので、敢えて、LORD に置き換える必要はない。

日本語でも、この英語の変化に影響されて、日本聖書協会の『聖書—近代日本の代表的文語訳聖書』では、神の固有の名エホバが使われている。しかし、『聖書—新共同訳』では、主に置き換わっている。例えば、エレミヤ書16章

11 URL: <http://www.bible-researcher.com/rsvpreface.html> のインターネットからの引用である。

21節を比較する。

エレミヤ書 16:21 (文語体)

故にみよわれ此度かれらに知らしむるところあらん即ち我手と我能  
をかれらに知らしめん彼らは我名のエホバなるを知るべし

エレミヤ書 16:21 (新共同訳)

それゆえ、わたしは彼らに知らせよう。

今度こそ、わたしは知らせる。

わたしの手、わたしの力強い業を。

彼らはわたしの名が主であることを知る。

名がエホバというのが文語訳である。名が主であるというのが新共同訳である。エホバを使った方が、主で置き換えるより、自然な日本語である、といえる。英語と同様、日本語でも神の固有の名エホバを主で置き換えるのは、妥当だとはいえない。次節では、さらにエホバを主に置き換えることによって、正確な理解が妨げられる可能性があることを扱う。

## 5 神の名を Jehovah と特定することの意義

本節では、神の名を Lord ではなく、Jehovah と固有の名を使うことが、聖書の正しい理解につながることを指摘して、固有の名を使うことの意義を考察する。「はじめに」で取り上げた詩編 110:1 をイエスが引用して論じているマタイによる福音書の 22 章 43-44 節に注目する。文脈を含めて正しく理解するために、22 章 41-46 節を分析する。

Matthew 22:41-46

While the Pharisees were gathered together, Jesus asked them, Saying, What think ye of Christ? whose son is he? They say unto him, The Son of David. He saith unto them, How then doth David in spirit call him Lord, saying, The LORD said unto my Lord, Sit thou on my right hand,

till I make thine enemies thy footstool? If David then call him Lord, how is he his son? And no man was able to answer him a word, neither durst any man from that day forth ask him any more questions.

The LORD と my Lord という表記を違えることにより、違う存在であることを示そうとしている。引用元の詩編の表題によると、これはダビデの言葉である。従って、イエスはマタイ 22 章 43-44 節で当時の宗教指導者たちに、ダビデがメシアのことを my Lord と言っているのはどうしてか、と質問しているのである。というのは、その前の部分でイエスがファリサイ派の人々に、What think ye of Christ? whose son is he? 「あなたたちはメシアのことをどう思うか。だれの子だろうか。」と質問している。それに対して彼らは「ダビデの子です。」と答えた。そこで、イエスは詩編 110 編 1 節を引用して、How then doth David in spirit call him Lord 「では、どうしてダビデは、霊を受けて、メシアを主と呼んでいるのだろうか。」と質問したのである。そして、詩編 110 編 1 節を引用して、The LORD said unto my Lord と述べている。新共同訳では「主は、わたしの主にお告げになった」と訳されていて、「主」と「わたしの主」と表記されている。英語のように大文字と小文字で表記を変えて、違う存在であることを示す工夫はされていない。少なくとも、The LORD は神「エホバ」のことであり、my Lord はメシアである「イエス」のことであって、違う存在である。1 世紀当時の宗教指導者であったファリサイ派の人々でさえ、Christ 「メシア」について、正しい理解ができていないことをイエスは指摘した。

旧約聖書の元の版では Tetragrammaton が使われていて、神とメシアの区別ははっきりわかる。3 節で分析したように 1 世紀の聖書筆者たちが、ギリシャ語の *Septuagint* から引用したのであれば、そこに Tetragrammaton があったはずである。しかし、Tetragrammaton を LORD に置き換えることにより、神とメシアの区別は不明瞭になる。なぜなら、文字で読む場合は、大文字か小文字かの違いがあるので、区別できるが、耳で朗読を聞く場合は、その違いがはっきりしない。

更に、日本語のように大文字と小文字の違いがないような言語では、その違いを表記するのは、難しくなる。そうすると、聖書の正しい理解が妨げら

れる可能性が出てくる。特に、新約聖書では弟子たちが、イエスのことを Lord「主」と呼んでいるので、神とイエスとの区別が紛らわしいことになってしまう。このような理由から、神を The LORD と呼ぶのではなく、はっきりと固有の名 Jehovah と表記することが正しい聖書の理解が得られる、と結論づけられる。

## 6 結論

本研究では、聖書の神の名が The LORD と表記されていることを取り上げた。神の名が示されている箇所、My name is The LORD. と表記されている箇所がある。訳すと「私の名は主」ということで、「名」が「主」という肩書で示されているのは、表現として不自然であることを取り上げた。

なぜ、神の名が The LORD になっているかという理由については、元々のヘブライ語の表記では、Tetragrammaton(英語のアルファベット表記だと YHWH)という4文字語で表記されていた。ヘブライ語では、母音を表記しないことが習慣であった。しかし、神の名をむやみに使ってはいけない、という掟を過剰に適用した結果、神の名の正しい発音がわからなくなってしまった。そこで、聖書の写字生のマソラ学者が、「神」を意味する Adonai という語を4文字語に充てるようになり、そこから、Tetragrammaton の代わりに Lord が使われるようになった経緯を理解することができた。

しかし、神の固有の名を示す Tetragrammaton が旧約聖書中に5000回以上使われていることからすると、聖書筆者にとって神の固有の名を使うことは重要なことであったと考えられる。それを Lord で置き換えて英訳することは、聖書筆者の意図を反映させている翻訳とはいえない、妥当性に欠ける訳ということになる。

正しい発音がわからないから固有の名を使わない、というのも妥当性に欠ける考えといえる。なぜなら、イエスを表す Jesus という名も、本来の正しい発音とは異なっていることがわかった。特に、最後の's'は所有格を意味する接尾辞であることから、Jesus というのは正しい表記ではないことがわかる。しかし、言葉とは常にそうであるように、正しいか正しくないかの問題よりも、習慣的にその表現が使われて、一般に浸透しているかどうか、



重要な要素であることが多い。神の名は 16 世紀以降 Jehovah と表記されることが一般的であった。しかし、その後、Jehovah は正しい発音ではないから、使うべきではない、という機運が起こって Lord に置き換えられる結果となった。

Jesus の語源は、Jah ( or Jahveh / Jehovah) is salvation である。即ち、Jesus の中に Tetragrammaton が含まれているのである。従って、Jesus という名を使うということは、Tetragrammaton を認めることである。従って、神の固有の名を使うのが合理的である、といえる。

最後に、神の固有の名を使わずに Lord を使うと聖書の正しい理解が妨げられる危険を指摘した。神を LORD と呼び、イエスも Lord と呼ぶと区別がつきにくくなり、誤った理解が生じかねない。1 世紀の宗教指導者であったファリサイ派の人たちの誤りをイエスが指摘したマタイによる福音書 22 章 41-46 節に出てくる LORD と Lord は、それぞれ神とメシアであるイエスを指しているが、この表記では、区別がつきにくい。神の固有の名 Jehovah を使う方が、正しい聖書の理解のために必要である。

以上の事実から、聖書の神の名 Tetragrammaton を LORD ではなく、Jehovah と表記することが、聖書筆者の意図を反映させた妥当な英訳聖書である、というのが本研究の結論である。

## 参考文献

### 書籍

Achtemeier, P. J. et al eds. (1996) *The HarperCollins Bible Dictionary*, HarperCollins.

Browning, W.R.F. (1996) *A Dictionary of the Bible*, Oxford UP.

岩下俊治 (1996) 「Hell 一考…聖書におけるその意味」『明星英米文学』第 11 号 95-106.

(1999) 「CROSS 一考 イエス・キリストは本当に十字架によって処刑されたか」『明星英米文学』第 14 号 123-134.

(2001) 「イエス・キリストは神かそれとも神のようなものか—ヨハネによる福音書 1 章 1 節の研究—」『明星英米文学』第 16 号 97-108.

Simpson, J.A. and E.S.C. Weiner (1989) *The Oxford English Dictionary*<sup>2</sup>, Clarendon Press, Oxford

寺澤 盾 (2013) 『聖書でたどる英語の歴史』大修館書店

## 印刷版聖書

*The Holy Bible, American Standard Version*, International Council of Religious Education, 1929, '93.

『聖書—近代日本の代表的文語訳聖書』日本聖書協会、1974.

『聖書—新共同訳』日本聖書協会、1993.

## CD-ROM 版

*The Bible in English*, Chadwyck-Healey, 1996

*The Bible Library*, Ellis Enterprise Inc., 1998

*The Oxford English Dictionary*, Oxford Clarendon Press, 1996

*Watchtower Library*, Watchtower Bible and Tract Society of Pennsylvania, 2019

## インターネット

Bible: King James Version ( <http://quod.lib.umich.edu/k/kjv/> ) (2019年11月3日閲覧)

Bible: Revised Standard Version ( <http://www.bible-researcher.com/rsvpreface.html> ) (2019年11月6日閲覧)

Howard, George (2000) *The Tetragrammaton and the Christian Greek Scriptures*, ( <http://www.tetragrammaton.org/copytetra.html> ) (2019年12月2日閲覧)